

コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性

飯田 香織ⁱ

本論文は、コミュニティ心理学者の役割や課題、コミュニティの定義について整理し、コミュニティの問題に対し心理学独自の視点を保ちながらいかに貢献できるかというコミュニティ心理学の独自性について検討することを目的とする。コミュニティ心理学におけるコミュニティ概念は、家族・学校・職場集団等の目に見える社会システムだけでなく、それらの社会システム間のネットワークのような目に見えない、アイデンティティを共有した集団も含む「機能的コミュニティ」を対象にしていることが明らかになった。また、日本のコミュニティ概念の特徴は「地域」という実際の居住地や実際に行動を共にすることが強く意識されていることが明らかになった。コミュニティ心理学の独自性を示す概念としては、①生態学的視座、②機能的コミュニティ、③臨床家から来談者へ積極的に近づくこと、④非専門家や他職種との対等な協働、⑤成長モデルと現実的な問題解決の視点、⑥人と環境の適合性、⑦エンパワメント、⑧コンサルテーション等の間接的支援、⑨予防的・成長促進の視点、⑩コミュニティ感覚 (Sense of Community)、⑪社会変革等が挙げられることが明らかになった。

キーワード：コミュニティ心理学、コミュニティ、機能的コミュニティ、生態学的視座、エンパワメント、コンサルテーション、予防、社会変革

はじめに

近年、臨床心理学において心理臨床家が行うべき役割は、村山・鶴養(2011)が「個人に対する援助を出発点とした心理臨床活動は、アセスメントと治療的かわりを中心発展してきたが、その視点が予防啓発活動に広がり、また健康な人に対する発達援助的かわりや、人々が生活するコミュニティのより健康的な活動促進へと広がってきている」と述べているように、個別臨床中心からコミュニティ全体を視野に入れた環境との関係性への介入や予防

へと広がりを見せている。しかし心理臨床家の中で、コミュニティ全体を視野に入れた活動についての知識が一般的になっているとは言えない現状がある。そこで、コミュニティ全体を視野に入れた臨床活動を行っていくためにも、定義の統一が十分であるとは言えない「コミュニティ」について述べられている定義を概観し、心理学の中でコミュニティ全体を視野に入れて、人と様々な環境の関係性に着目していく視点を持つコミュニティ心理学の概念を中心に整理を試みてみたい。

コミュニティ心理学は、1965年5月マサチューセッツのスワンプスコットに地域精神保健活動に従事している39名の臨床心理学者が、社会的介入の技術を持ち、コミュニティの問題に真に対処できるため

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

の教育訓練のあり方を検討するために集まって「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議 (Boston Conference on the Education of Psychologists for Community Mental Health)」を開催し、この会議においてコミュニティ心理学という言葉が初めて正式に使用されたことから始まった学問であると言われている。(Bennett, C.C. et al., 1966) この会議でのコミュニティ心理学の定義は「複雑に相互作用しあっている、社会システムと個人の行動を結びつける心理過程全般についての研究を行う。この結びつけを概念的かつ実験的に明らかにすることによって、個人、集団、および社会システムがよりよく機能するような活動計画の基礎を提供する」(Bennett, C.C. et al., 1966) というものであった。

コミュニティ心理学の誕生には、地域精神保健運動の高まりが大きな影響を与えたと言われている。(植村, 2012) 1963年に米国大統領ジョン・F・ケネディが「精神障害者と精神薄弱者に関する教書」を発表し、同年末に「地域精神保健センター法 (Community Mental Center Act)」が議会を通過したことに象徴される地域精神保健運動の高まりによって、精神疾患の方が地域で生活していくことができるように地域での支援を考えていく必要性が生じてきた。そして、1965年5月に「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議」を開いたのである。この会議では、コミュニティの抱えている問題に対し、心理学の独自性を保ちながらいかに貢献していくかを検討し、精神医学のモデルを超えたジャンルとしてコミュニティ心理学が唱えられた。そして、この会議には心理学諸分野に加えて社会学、福祉学、医学、看護学の専門家が集まり、「治療よりも予防」、「生態学的視座」などのコミュニティ心理学の独自の視点が確認された。(笹尾ほか, 2007) このようにして誕生したコミュニティ心理学であるが、「コミュニティ心理学という、心理学における新領域の必要性を認める点での合意はあったが、コミュニティ心理学者の役割や課題についての『定

義』に関しては、何年にもわたって議論されてきた」とされており、現在でも定義の不明確さがあることが示されている(笹尾他, 2007)。その中でも、コミュニティ心理学の定義の前提となるコミュニティという概念自体も、従来の社会学で言われてきた定義との異同も含めて、概念の整理が必要であると思われる。また、コミュニティ心理学の中には、コミュニティ感覚という独自の概念もあり、近接分野やコミュニティ感覚について概観し、コミュニティ心理学において扱うところのコミュニティ概念やコミュニティ心理学の独自性を考えることを本論の目的とする。

I. 「コミュニティ」の語源と意味

コミュニティ (community) という英語は、もともとはラテン語のコミュニニスという言葉で「com」という字と「munus」という字が一緒になったものである。「com」というラテン語の意味は英語の「with」にあたり、「一緒に」「共同して」である。「munus」は英語の「service」「duty」の意味で、「貢献」「任務」である。したがって、コミュニティの意味は「共同の貢献」「一緒に任務を遂行すること」ということになる。(鈴木, 1986) また、新グローバル英和辞典(木原編, 1994)によると、「community」の意味は、①地域社会、地域(共同体)、②(利害、宗教、人種などを同じくする)集団、特殊社会、③(一般)社会、公衆、④(財産などの)共有、共用、(思想、利害などの)共通性、類似、⑤(動物の)群生、(植物の)群落と訳されている。さらに、語源として「mun」の部分「共通の」という意味を持つということも記載されている。いずれにしても「共通の」、「一緒の」、「一緒に何かをする」という感覚が含まれていると言える。

II. 社会学におけるコミュニティ概念

社会学においては、農村社会学、都市社会学、地

域社会学などの様々な分野で以前からコミュニティについて研究されてきた。そのため、まず社会学におけるコミュニティ概念について考えてみたい。

社会学者マッキーパー（MacIver, R.M）はアメリカ農村社会を調査して、コミュニティが意味するものとして「地域性と共同体感情」にまとめた。（山本他, 1995）「コミュニティの定義」という論文を書いたヒラリー（Hillery, G.A）は、学派に偏らない選定を工夫し、コミュニティについて書かれている94の社会学の書籍や雑誌論文を整理し、共通する概念をまとめようと試みた。その結果、①94のすべての定義に共通する要素は存在しない、②69の定義が「社会的相互作用」「領域」「共通の絆」の3つをコミュニティ生活に一般に見出される要素とする点で一致している、③70の定義が「社会的相互作用」と「領域」をコミュニティの必要要素としてあげている、④73の定義が「社会的相互作用」と「共通の絆」を必要要素としてあげている、⑤3つの定義以外の全定義がコミュニティ生活において必要な要素として「社会的相互作用」を強調していることを見出した（鈴木編, 1978）。つまり「コミュニティ」という概念には、最低でも「社会的相互作用」が必要であり、それに加えて、「共通の絆」、「領域」という要素が含まれていると言うことができる。

もともと社会学では、コミュニティについて定型的で総合的な概念として考えられることが多かったが、1960年頃より静態的な概念を動態化する試みがなされ、「相互作用的アプローチ」や「機能的アプローチ」、「システム論的アプローチ」などが考えられるようになっていった。（山本他, 1995）

「相互作用的アプローチ」とは、コミュニティの構成要素である個人や集団の相互作用そのものを明らかにしようとするものであり、カウフマン（Kaufman, H.F）は、関心と欲求の包括性の程度や、地域への一体化の程度、地元住民が巻き込まれている数・地位・程度、含まれている集団の数と意義、行為が地元社会を維持または変える程度、行為の組織化の程度などの具体的な行動が「相互作用のシス

テム」として存在する範囲をコミュニティの範囲として定めようと考えた。（倉田, 1985）

「機能的アプローチ」とは、機能的コミュニティについて研究するアプローチであるが、イギリスの社会哲学者プラント（Plant, R.）は、「機能的コミュニティは、共同の関心を持った人々の間の空間的接近を意味する必要がない、特定関心についての何らかのアイデンティティの意識に基づいたコミュニティを指している。このような機能的コミュニティは、分業により生み出された関心の特殊な領域に対応している」と述べている。（Plant, 1979）ここでは、何らかのアイデンティティの意識に基づく結びつきが強調され、物理的な居住地や空間的接近が無くても、コミュニティとして成り立つことを示している。

「システム論的アプローチ」とは、ウォーレン（Warren, R.L）によって提唱された、コミュニティ分析の新しい方法（コミュニティ・システム論）である。ウォーレンはコミュニティを「地域にかかわりある主要な機能を果たしている社会単位やシステムの複合体」と定義しており、地域性と機能（課題）がコミュニティの焦点とされている。この考え方では、コミュニティ・システムは①境界維持の性格を持っており、②システムの内部と外部の区別があり、③システム維持のために機能が営まれる、④システムには近郊維持の過程が存在するというもので、コミュニティ・システムには、基本的にはっきりと境界で区切られる範囲があり、ある特定の課題を遂行することを目的としたつながりという要素があると言えるであろう（山本他, 1995）。

Ⅲ. 日本のコミュニティ概念の特徴

1. 日本のコミュニティ概念の特徴

今後、日本においてコミュニティ心理学の視点を活かした心理臨床を考えていくためには、日本で一般的に考えられているコミュニティ概念について、考えておく必要がある。

近年の日本におけるコミュニティについて、山本

他(1995)は「伝統的な地域共同体が崩壊し、コミュニティの本来の特質であった『地域性』と『協働性』とがいずれもその力を失い、松原治郎のいう『生活優先の原則』に支えられたコミュニティ新しいコミュニティの形成の意義が叫ばれて久しい。それが求められる背景には、精神的共同性への人びとの希求や、生活防衛上の機能的共同化の必要性、核家族化の進行に伴う家族機能の脆弱化、高齢化社会への移行に代表される福祉・健康問題への不安や要求などがある」と述べている。この中に出てくる松原治郎の「生活優先の原則」とは、松原がコミュニティについて「コミュニティとは、地域社会という生活の場において、市民としての自主性と権利と責任とを自覚した住民が、共通の地域への結びつきの感情と共通の目標をもって共通の行動をとろうとする、態度のうちに見出されるものである。さらにいえば、生活環境を等しくし、それに依拠しながら生活を向上せしめようとする方向に一致できる人々が作り上げる地域集団活動の体系にこそ、コミュニティは具現される」(松原, 1978)と規定した内容を指している。この定義を見ると、まさしく「地域社会という生活の場において」、「共通の地域への結びつきの感情」を持ち、「共通の行動をとる」という、実際の居住地において実際の行動を共にすることという感覚が強いことがうかがえる。

さらに、山本(2001)がコミュニティ・アプローチの別名としての臨床心理学的地域援助について「地域社会で生活を営んでいる人々の心の問題の発生予防、心の支援、社会的能力の向上、その人々が生活している心理的・社会的環境の調整、心に関する情報の提供を行う臨床心理学的行為」と述べているように、実際に居住している地域社会との関係を意識した部分が強いと思われる。

植村(2012)によると、日本では1970年代に社会学を中心に「コミュニティ意識」の研究が盛んに行われるようになったという。これは「1960年代からの高度経済成長の影響を受けて、過疎・過密という言葉に象徴されるように、旧来の地域共同体は急速

に崩壊したものの、しかし、それに代わる新しい地域社会はまだ創生されていない中で、『生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として、地域性と各種の共通目標を持った、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団』(国民生活審議会調査部会編, 1969)を『コミュニティ』と定義して、コミュニティづくりを模索する」という中で考えられてきた。この国民生活審議会調査部会編の文章を見ても、地域性というものが想定されているとすることができる。

近年は居住地を中心とした地域社会のつながりが弱まり、インターネットなどの通信機器の発展とともに「家族、学校、職場集団、公共の組織などのような目に見える社会システムはもとより、それらの社会システム間のネットワークのような目に見えないもの」も指す、「機能的なコミュニティ」が想定されるようになってきている。そして、コミュニティ心理学が介入・援助の対象としているのは、目に見える社会だけでなく、目に見えない社会システム間のネットワークも含めた意味での「機能的なコミュニティ」になる(山本ら, 1995)。日本においてもコミュニティ心理学の中では、コミュニティと言った時にこのような機能的なコミュニティという概念が広まりつつあるが、一般的には居住地を中心とした地域を指すことが多いように思われる。

このように、日本では「コミュニティ」=「地域」と訳されることが一般的であるために、地域という限局したイメージが持たれるようになってしまっている。このことについては、山本(2000)も、「コミュニティ(Community)の意味は、地域といった管轄区のように場所をしめすような意味ではなく、もっと深い意味があります」、「コミュニティを『地域』という言葉として地域精神保健としたがゆえに、地域精神保健が中央集権的行政施策の末端を担わされる保健所精神保健の意味にしか受け取られないなど、ただ病院や収容施設の外で精神保健活動をするという意味でしかなくなってしまったのではないのでしょうか」と、コミュニティ心理学で考えていくと

ころの「コミュニティ」は、「地域」という意味に限定されたものでないことを示している。そして、コミュニティ心理学が地域心理学ではなく「コミュニティ心理学」という名前で発展してきていることに含まれる意味について、『「コミュニティ」の精神には、これまでの医療や精神保健サービスの根本的な発想の転換を目指し、地域社会の住民のニーズに適合したサービス内容とサービス・システムづくりをめざし、さらに社会システムそのものに問題があれば、それを改善していこうとする姿勢が含まれているのです。それだからこそ Community Psychology は地域心理学ではなく、コミュニティ心理学でなくてはならない』と述べている。

現時点では、日本ではコミュニティという言葉に対して「地域」という意味が強いが、本来のコミュニティ心理学の役割を果たしていくためにも、山本が言うようなより広い意味でのコミュニティを対象とした活動が必要であり、その部分に日本におけるコミュニティ心理学の発展の意味を見出すことができると思われる。

2. コミュニティ・スクール

上記のような日本におけるコミュニティ概念が公的な事業においても使用されている例として、文部科学省が行っているコミュニティ・スクールという事業を紹介したい。

「学校コミュニティ」と言った場合、本来であれば学校にかかわる子ども、教員、地域の方等を含めた精神的つながりを有した共同体集団（機能的コミュニティ）としての意味を持つが、文部科学省が行う「コミュニティ・スクール」においては、地域の方々だけを指して「コミュニティ」と呼び、地域の方々によくかかわっていただく学校という意味での「コミュニティ・スクール」になってしまっている。

コミュニティ・スクールとは、文部科学省のホームページ（初等中等教育局参事官（学校運営支援担当）付 運営支援企画係）によると、「学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、一緒に協

働しながら子どもたちの豊かな成長を支えていく『地域とともにある学校づくり』を進める仕組み』である。そして、コミュニティ・スクールには保護者や地域住民などから構成される学校運営協議会が設けられ、学校運営の基本方針を承認したり教育活動などについて意見を述べたりするという取り組みが行われる。これらの活動を通じて、保護者や地域の方々の意見を学校運営に反映させていこうという制度である（平成24年度「地域とともにある学校づくり」実施報告）。また、コミュニティ・スクールは小・中学校はもちろん、幼稚園や高等学校などの地域の公立学校に導入可能である。導入するかどうかは学校、保護者や地域の方々の意向等を踏まえて、学校を設置する地方公共団体の教育委員会が決定するとされている。

IV. コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性

1. コミュニティの定義

1965年の「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議」におけるコミュニティ心理学の定義は「複雑に相互作用しあっている、社会システムと個人の行動を結びつける心理過程全般についての研究を行う。この結びつけを概念的かつ実験的に明らかにすることによって、個人、集団、および社会システムがよりよく機能するような活動計画の基礎を提供する」（Bennett, C.C. et al., 1966）というものであった。この定義はコミュニティ心理学の定義としてコミュニティ心理学が果たすべき学問的役割や、臨床的役割も含む概念となっている。今回は、その前提となる、コミュニティ心理学の中で言われているコミュニティ概念の定義について考えてみたい。

Sarason (1974) は、コミュニティ心理学におけるコミュニティとは「人が依存することができ、たやすく利用が可能で、お互いに支援的な関係のネットワークである」と定義している。そして、こうした

コミュニティに対して人々が持つ態度をコミュニティ感覚 (sense of community : SOC), または心理的コミュニティ感覚 (psychological sense of community) と命名して, コミュニティ感覚の欠如や希薄さは我々の生活におけるもっとも破壊的な原動力になっていると, この概念の重要性を指摘した。このコミュニティ感覚 (Sense of community) については, コミュニティ心理学の中では独自に研究されている分野であり, 後にコミュニティ感覚という項目において詳しく述べることとする。

地域精神保健活動に従事したクラインによるコミュニティの定義としては, 「物理的に所在するコミュニティと, 物理的に依存しないコミュニティの両者に適応可能でなければならない」, 「コミュニティは安定と身体的安全を手に入れ, ストレス状態にあるときは支持を引き出し, さらにライフサイクル全体を通じて個性と重要感を獲得するなどのことをある1領域の人々の間での様式化された相互作用である」(Klein, D. 1968) というものがある。

「コミュニティ心理学は, 個人と環境との適合性のありように実践的に介入する姿勢をもち, 両者の相互作用の分析にあたって, 個人の側の条件以上に環境側 (コミュニティ) への働きかけに力点を置こうとしている。このような立場からすれば, コミュニティ心理学にとって戦略的意味をもつコミュニティの概念は, 安藤延男が指摘するように, 個人や家族, ならびに各種の集団ごとに個別に捉えることができる, 測定や介入の可能な対象としての『機能的コミュニティ』でなければならない」(山本他, 1995) と言われるように, 上述のような社会学者の定義は地域共同体的なコミュニティであるのに対して, コミュニティ心理学が介入・援助をするコミュニティは機能的コミュニティである。機能的なコミュニティとは, 家族, 学校, 職場集団, 公共の組織などのような目に見える社会システムだけでなく, それらの社会システム間のネットワークのような目に見えないものも指している。つまり, 上述の社会哲学者プラント (Plant, R.) の「機能的コミュニテ

ィ」についての定義である「共同の関心を持った人々の中の空間的接近を意味する必要がない, 特定関心についての何らかのアイデンティティの意識に基づいたコミュニティを指している」という概念に近いものであると考えられる。

さらに金子 (1989) は, コミュニティを「社会的資源の加工によって生み出されるサービスの供給システム」と捉え, コミュニティの goodness の程度を判断するものが「生活の質 (QOL)」であるとしている。金子 (1989) は, 今までのヒラリーなどの「社会的相互作用」, 「共通の絆」という概念をコミュニティの構成要素としていたところに加えて, 生活環境や地域施設というコミュニティの物理的な構造を意味する「物財」という要素を導入することを主張している。つまり, コミュニティは物財 (もの), 関係 (ひと), 意識 (こころ) の3側面のそれぞれを研究方法として現状についての記述的方法か, 目標となる形を志向した規範的方法かによって分析・整理するものであるとしている。

植村編 (2007) では, コミュニティ心理学におけるコミュニティについて, 「もともとの意味の『地域社会』に留まらず, 学校や会社, 病院, 施設, あるいはまたその下位の単位であるクラス, 職場, 病棟などもコミュニティという呼び方をしている。また, これら可視的なものだけではなく, 例えば HIV 患者の会など各種サークル, さらに最近ではサイバースペース (電脳空間) 上に作り出される無数のバーチャル (仮想) コミュニティ, いわゆるインターネット・コミュニティをも視野にいれたものとなっている」と定義している。その上でそのコミュニティについて「かつては『地理的コミュニティ』, すなわち, 有る一定の場所に生活しているという生活環境を共有することから生まれる, いわゆる地域コミュニティに関心が置かれたが, 交通・通信手段の発達や人々の流動性の高まり, 経済やサービスのグローバル化やネットワーク化など, 急速な変化とともに人々の生活様式も大きく変化し, 町内や部落などの物理的範囲に基づく地理的コミュニティは, その

現実的意味や役割をもちえなくなっている。それに代わる、あるいは補うものとして今日では『関係的コミュニティ』が重きをなしてきている。それは、物理的な場所の広がりやの大小を問わず、生活する人々にとって共通の規範や価値、関心、目標、同一視と信頼の感情を共有していることから生まれる、社会・心理的な場に基づくコミュニティであり、ここで行われている相互作用に実践的に介入して行くことが可能な機能的コミュニティを指している」というように、コミュニティ心理学の中でのコミュニティという定義は、地理的コミュニティではなく、より広い意味での関係的コミュニティという機能的コミュニティを指していると言える。

2. コミュニティ感覚 (Sense of Community)

コミュニティ心理学においてコミュニティとは、「人が依存することができ、たやすく利用が可能で、お互いに支援的な関係のネットワークである」(Sarason, 1974, p.1) という定義があるように、地理的なコミュニティだけではなく、社会・心理的關係に基づく関係的コミュニティも含まれた概念であるということをも前項目で述べた。そして、コミュニティ感覚について Sarason は「他者との類似性の知覚、他者との相互依存的関係の承認、他者が期待するものを与えたり自分が期待するものを他者から得たりすることによって相互依存関係を進んで維持しようとする気持ち、自分はある大きな依存可能な安定した構造の一部分であるという感覚」(Sarason, 1974, p.157) と定義した。

その後コミュニティ感覚という概念が再び脚光を浴びるようになったのは、McMillan & Chavis (1986) による再定義と「Sense of Community Index (SCI)」という心理尺度が作成されたことにある (Chavis et al, 1986)。彼らは、コミュニティ感覚を「メンバーが持つ所属感、メンバーがメンバー同士あるいは集団に対してもっている重要性の感覚、また、集団とともにコミットメントすることによってメンバーのニーズを満たすことができるという信

念の共有」(McMillan & Chavis, 1986) と定義した。そして、McMillan & Chavis はコミュニティ感覚を理解し測定することを目的に、その構成要素として①メンバーシップ (membership)、②影響力 (influence)、③統合とニーズの充足 (integration and fulfillment of needs)、④情緒的結合の共有 (shared emotional connection) の4つをあげた。

それぞれについて植村 (2012) を参考にして詳しく述べると①メンバーシップの中にさらに四つの概念が含まれる。1つ目は「コミュニティの境界」つまりメンバーと非メンバーを分ける境界であり、地理的境界、目的、関心の共有による境界などを指す。2つ目は「所属感」であり、メンバーとして受容されていると感じ、アイデンティティを獲得することである。3つ目は、「情緒的安心感」であり所属感を得ることによって安心と安全の感覚が生まれ、さらなる自己開示が生まれることになる。4つ目は、「投資」であり、所属感や安心・安全感を得た個人は、コミュニティに対して貢献しようとし、金銭や労力の提供等有形・無形の投資活動を行うことになる。

②影響力についても、大きく四つの概念が含まれている。1つ目は、メンバーがコミュニティに影響を与えていると感じることである。2つ目は、コミュニティがメンバーに影響を与えていると感じることである。3つ目は、コミュニティやメンバー間での親密性を生むことを目的としてコミュニティへの同調が生じること、均一性・統一性を求める力が生まれることである。4つ目は、コミュニティとメンバーとの互恵的關係の重視である。

③統合とニーズの充足については、コミュニティが個人のニーズの充足の場を提供するとともに、コミュニティのメンバーであることによって個人のニーズを充足することができるという、自己のニーズの充足が他者のニーズの充足と結びついているという感覚が得られることを指す。

④情緒的結合の共有については、情緒的結合は、メンバー間のポジティブな交流、重要な出来事や問

題を共有し解決すること、メンバーを称えること、コミュニティへの積極的参与と投資、メンバー間の精神的つながりの経験を通して培われ促進されていくと言われている。

これらの概念を含んだコミュニティ感覚を測定する質問紙として、SCI-2: SENSE OF COMMUNITY INDEX II (植村試訳) (表1) というものがある。これは、McMillan & Chavis (1986)

によって作成された SCI: SENSE OF COMMUNITY INDEX に対して、四つの要素の独立性と妥当性に関して、実証研究の中で必ずしも一致しないことが出て来たため、そのような部分を改善することを目的として Chavis et al. (2008) が、SCI-2 として改訂版を発表したものである。SCI との違いとしては、植村 (2012) によると SCI が12項目であったのに対して、合計24項目になり、かつ、すべての項目が肯

表1 SCI-2: SENSE OF COMMUNITY INDEX II (植村試訳) (植村, 2012)

以下のそれぞれの文章は、あなたがこのコミュニティについてどのように感じているかを、どれくらいうまく表していますか？

ニーズの強化	1. 私はこのコミュニティの一部であることで、自分の重要なニーズを叶えている	影響力	13. このコミュニティに適合することは、私にとって重要である
	2. コミュニティのメンバーと私は、同じ事柄に価値を置いている		14. このコミュニティは、他のコミュニティに影響を及ぼすことができる
	3. このコミュニティは、メンバーのニーズに応じること的成功してきている		15. 私は他のコミュニティ・メンバーが、私のことをどう思っているか気になる
	4. このコミュニティのメンバーであることが、私を快適な気持ちにさせている		16. 私はこのコミュニティの在り方に対して影響力をもっている
	5. 問題を抱えている時、私はこのコミュニティのメンバーとそのことについて話し合うことができる		17. このコミュニティで何か問題が生じたとき、メンバーはそれを解決することができる
	6. このコミュニティの人たちは、類似のニーズや優先事項、目標をもっている		18. このコミュニティはよいリーダーを持っている
メンバーシップ	7. 私はこのコミュニティの人たちを信頼することができる	情緒的結合の共有	19. このコミュニティの一部であることは、私にとって非常に重要である
	8. 私はこのコミュニティのメンバーのほとんどの人を認識することができる		20. 私は他のコミュニティ・メンバーと運命共同体であり、彼らと共にあることを楽しんでいる
	9. コミュニティのメンバーのほとんどが、私を知っている		21. 私はこれからもずっと、このコミュニティの一部でありたい
	10. このコミュニティは、人々が認識することができる衣装や記号、芸術、建造物、ロゴマーク、標識、旗などのようなシンボルやメンバーであることの表出物をもっている		22. このコミュニティのメンバーは、祝日や祝典、災害といったような重要な出来事をいっしょに共有してきている
	11. 私は多くの時間や努力を、このコミュニティの一部であることに用いている		23. 私はこのコミュニティの未来について希望をもっている
	12. このコミュニティのメンバーであることは、私のアイデンティティの一部である		24. このコミュニティのメンバーは、互いを気にかけている

全くそうは思わない = 0, いくぶんかそう思う = 1, だいたいそう思う = 2, 完全にそう思う = 3 © SCI 合計得点: 1~24の合計 © 解釈度得点: 4尺度ごとの合計 (植村は、Chavis, D.M. が主宰するウェブサイトから転載した。ウェブサイトには、英語のまま掲載されており、転載する際に植村が試訳をつけたということである。)

定型の質問表現となり、真-偽2値であったものがリッカート・タイプの4肢選択の反応形式になっている。また、SCIでは“block”と呼ばれていたものが、すべて“community”に統一されている。質問内容も、ほぼ全部新しいものとなっており、彼らによれば、項目数を増やしたことで、オリジナルの理論に記述されたコミュニティ感覚の属性のすべてがカバーできたとしている。

そして、今までのコミュニティ感覚についての研究からは、コミュニティ感覚の高さと、人生への満足感や主観的幸福感の高さ、および孤独感の低さとの間には正の相関が確認されている（笹尾，2007）。

また、比較的メンバーの数が少なく小さなコミュニティにおいてコミュニティ感覚が高い（Obst et al, 2002a）ことや、コミュニティでの居住年数や関わりの長さなどの時間的要因の影響も認められている（Chavis et al, 1986; Pretty et al, 1994）。他にも、コミュニティにおける人種・民族的状況、居住形態、所得レベル、年齢や教育歴、人格特性などとの関連も指摘されている（Dalton et al, 2007）。

しかし最近では、「否定的コミュニティ感覚（negative sense of community）」という概念も現れてきている。Brodsky（1996）は、人がコミュニティに対して否定的に感じているとき、自ら距離を置いたり、否定的コミュニティ感覚を養ったりすることでコミュニティの関与に抵抗し、自らのウェルビーイングを強化しようとするという。

3. コミュニティ・カウンセリング

コミュニティ・カウンセリングとは、「元々は、学校・大学の学生相談以外の機関や場面で使われていたカウンセリングのことをコミュニティ・カウンセリングと呼んでいた。1908年にPersons, Fがアメリカ・ボストンに『ボストン職業相談所』を開設したのがその始まりである」（井上，2007）以下、井上（2007）を中心としてまとめて紹介する。

世界的には、第二次世界大戦まではカウンセラーの仕事は主に学校・大学を舞台にして行われており、

第二次世界大戦後、復員兵へのカウンセリングの受容が高まり、民間人をも対象となることに発展していき、コミュニティにおけるカウンセリングが広がっていったと言われている（Hershenson & Berger, 2001）。そのような経過から、コミュニティ・カウンセリングは予防精神医学やコミュニティ心理学の発展を意識したものとなっており、コミュニティ・カウンセリングが、それ特有の課題・プロセス・志向性を持つものとして広く認識されたのは、1990年代に入ってからであった。そして、その内容は「従来のカウンセリングの成果と、コミュニティ心理学の成果と、ソーシャルワークの成果を統合した領域であるといつてよいだろう」（井上，2007）と言われるものであり、やはりコミュニティ心理学全般に言えることであるが、伝統的なカウンセリングから発展し、ソーシャルワークと重なる部分も多いということがわかる。

そして、コミュニティ・カウンセリングについての最近の定義としては、Lewis et al.（2003）は、「個人の発達と全ての個人およびコミュニティの幸福を促進する介入方略とサービスを総合的に援助する枠組み」というものがある。そこでは、以下のような六つのコミュニティ・カウンセリングの特徴があるとする。

- ① コミュニティ・カウンセリングの立場は、個人をその生きる文脈でとらえ、社会環境の要因を重視するため、環境を変革することも含めて問題を解決しようとする。
- ② 組織的・個人的な変化を促進するエンパワメントである。
- ③ 援助の方法には多様なアプローチがある。伝統的な治療モデルによるカウンセリングだけでは限界があると考え、より有効で効率的にクライアントの変化を作り出すために、個別のカウンセリングや心理療法の他に危機介入、関係促進、コンサルテーション、コーディネーション、グループ・ワーク、アドボカシーなどが含まれる。
- ④ 多文化に配慮すべきカウンセリングである。

- ⑤ 予防に重点が置かれるカウンセリングである。
- ⑥ さまざまな状況に応用可能なカウンセリングである。地域精神衛生活動に端を発しているが、その他の分野(学校・家族・産業・大学)などでも応用可能なものである。

Lewis et al. (2003) はさらに、コミュニティ・カウンセリングを、相手が個別のクライアントか集団的なコミュニティであるかどうかと、サービスが直接的か間接的かで以下の四種類に大別できるとしている。1つ目は「直接的コミュニティ・サービス」であり、つまり予防教育のことである。2つ目は「直接的クライアント・サービス」であり、アウトリーチ(面接室でカウンセリングをするだけでなく、地域に出かけて行って行うカウンセリング)とカウンセリングである。3つ目は「間接的コミュニティ・サービス」であり、組織変革と公共政策が含まれる。4つ目は「間接的クライアント・サービス」であり、アドボカシー(社会的弱者のための権利擁護)とコンサルテーション(専門家同士の対等な相互作用)が含まれる。

コミュニティ・カウンセラーは「多面的なプログラム作り、個人のカウンセリングを超え、予防教育やハイリスク状況での人々への対処へのアウトリーチ、問題を抱え苦しんでいる人々のためのアドボカシー、そして公共政策に影響を与える努力を行う」必要があるとされる(井上, 2007)。

4. 生態学的視座

コミュニティ心理学では、人間の行動について、生態学的視座(ecological perspective)から捉える。生態学的視座とは、すべての行動がその人が置かれている文脈(Context)との相互作用の中で起こると考えるもので、Lewin(1951 猪股訳 1956)の有名な公式である $B=f(P,E)$ 、つまり人の行動(B)は、人(P)の側の要因と、その人を取り巻いている環境(E)の要因との相互作用によって決定される、と考えるものである。

それまでの臨床心理学は、個人に起こっている課

題を文脈(環境)から切り離して捉え、治療者とクライアント(来談者)の二者関係の中で改善を目指していくことが中心であった。

このことを、植村(2012)は、酸欠状態のどぶ川で呼吸できずに苦しんでいる金魚を掬ってきて、浄化装置の付いた水槽に入れることで回復しても、またどぶ川に戻すと病気を再発させるという例えで表現している。これは、つまり「どぶ川(環境: 日常の社会生活場面)でもがいている金魚(人: クライアント)を水槽(クリニック)で治療して蘇生させても、戻っていく環境が元のままでは根本的な解決にならない。川の改修(環境の改善)をしてこそ、金魚は安心や健康や幸福を得られるのである」(植村, 2012)ということである。

このように、コミュニティ心理学では、人と環境の適合(person-environment fit: P-E fit)を重視する。人と環境の適合(person-environment fit: P-E fit)とは、Scileppi et al. (2000)の定義によれば、「ある個人のニーズや能力が、ある社会場面の中に存在している資源や機会と調和しているその程度」であるとされる。そして、その際の環境とは個人によって知覚された環境、つまり主観的環境であることが重要であり、人と環境の間で何らかの不適合が生じていれば、環境と人の両方を対等に検査しなければならないとされている。

この生態学的視座を考えていく際には、押さえておかないといけないいくつかの理論がある。それを植村(2012)を参考にして紹介したい。

(1) バーカー(Barker, R.G.)の生態学的心理学と行動場面理論

Barker(1968)は、行動の研究は実験室や作られた場面ではなく、日常の中でなされるのが最も良いという考えのもと、ある環境場面では誰もが示す行動と、その場面の構造特性との間の関係を明らかにする研究を自然観察法によって行った。それらの研究によって、「行動場面は、そこに臨んだ者に共通の行動様式(定立型: standing pattern)を起こさせ

る力をもっている」ということを示した。

(2) ケリー (Kelly, J.G) の生態学の原理

Kelly (1996) は、コミュニティの中での個人の機能に影響を及ぼす力を理解するには生態学の視点が重要であるとして、4つの生態学原理を提唱している。

1つ目は「相互依存 (interdependence)」であり、「ある社会システムのすべての部分と一緒に作動しており、一つの部分における変化はシステムを構成しているすべての部分に影響を及ぼす」というものである。

2つ目は「資源の循環 (cycling of resource)」であり、社会のシステムや資源やエネルギーについて、ある部分では必要なくなったものが他の場所では有益な資源になり得るという考え方である。

3つ目は「順応 (adaptation)」であり、環境に順応することで、個人のコンピテンスを高めたり、人が広範囲な生育地の中で成長することを可能にしたり、その環境を親しみのあるものとする事で成長が促進されるとする概念である。

4つ目は、「遷移 (succession)」であり「環境は長い時間をかけて連続しながら変化し、より順応にとむ集団が順応の低いものにとって代わる」というものである。「環境は行動から中立であるのではなく、むしろ、環境はある集団を好み他を強圧するのが自然生態の原理であり、人間生態もこれに類似する」という概念である。

(3) ムース (Moos, R.H.) の社会的風土の知覚

Moos (1973) は、ある特定の環境場面の中で過ごしている人々のその環境場面に対する認知を集めることによって、その場面や環境の雰囲気や社会的風土に関する関係者の総意を示すプロフィールを提示することができるという理論から、社会的風土尺度 (social climate scale) を開発した。

(4) ブロンフェンブレナー (Bronfenbrenner, U.) の児童発達生態学理論

Bronfenbrenner (1979) は、児童発達の理論において、子どもが文脈から独立した一つの存在物として扱われていることに異を唱え、理論と実証研究の中に文脈を組み込む基礎を提供することを目的に、『人間発達の生態学』を著した。彼は社会的文脈を、図1のようにマイクロ、メゾ、エクソ、マクロと呼ぶ、1組の同心円を類推させる4つの入れ籠状のシステムで構成されるものと想定した。

最小の単位であるマイクロシステム (microsystem) とは、家庭や学級のような個々の子どもが直接的な経験を持ち、自分という存在を見出す場面のことである。

次のメゾシステム (mesosystem) とは、2つあるいはそれ以上のマイクロシステム間の連結からなっており、子どもの家庭と学校や、病院と家族の連携に見られるようなマイクロシステム相互間の関係である。

エクソシステム (exosystem) とは、マイクロシステムや子どもに直接関わることはないが、子どもの直接的環境に影響を及ぼす環境場面間の関係である。例えば、教育委員会や親の勤務先などである。

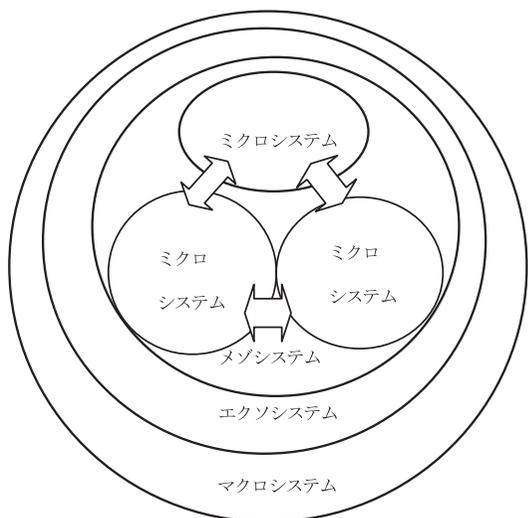


図1 Bronfenbrennerの人間発達についての生態学的モデル

マクロシステム (macrosystem) は、イデオロギーや文化、政治的・経済的条件のような規模の大きな社会的要因が含まれ、例えば、労働市場の様相(失業率)や社会の性別役割観などが含まれる。

5. エンパワメント

エンパワメントとは、「自らの内なる力に自ら気づいてそれを引き出していくこと、その力が個人・グループ・コミュニティの3層で展開していくことといえる。端的に言えば、能力の顕在化・活用・社会化である」(三島, 2001)と言われる概念である。エンパワメントの考え方は、従来の専門職からのトップダウンのようなサービス・システムのありように意義を唱え、ユーザーの自己統制力とサービス提供者に対する発言力を強くしていこうという地域中心主義とも合致したものである。コミュニティ心理学の中でエンパワメントの研究を行ってきた Rappaport は、エンパワメントは、プロセスとしてとらえられ、個人のレベル、組織のレベル、コミュニティのレベルで自らの生活に統制感 (sense of control) を持つことであると規定している。また、1985年の Rappaport による「エンパワメントの言語の力」という論文の中では、「自分自身に心理学的統制を獲得すること。さらに広がって、他者に積極的な影響を及ぼすこと。究極的には、より大きなコミュニティに影響を及ぼすところまでたどり着くこと (といったことに似た何か) (P.15)」と規定している。

さらに Rappaport (1987) は、エンパワメントをコミュニティ心理学の生態学的理論 (ecological theory) の主題に据え、「エンパワメントは過程として捉えられる。すなわち、人や組織やコミュニティが自らの生活を通して支配性を獲得していくメカニズムである」と定義している。つまり「エンパワメントは専門職との関係の枠組みを離れたところで使われてこそ力を発揮する」(三島, 2007) ものであり、真にエンパワメントされた人々は自らの力を最大限発揮することとなりその人々がメンバーであるコミ

ュニティは予防的な力を持つということである。

このエンパワメントの概念は、三島 (2007) の中で「エンパワメント・アプローチのソーシャルワークの対象は『人』と『環境』の相互作用に向けられる」と述べられているように、ソーシャルワークにおけるエンパワメントの概念と近いものがあると考えられる。ソーシャルワークの領域でエンパワメントについて述べられている定義としては、Adams (2003) の「エンパワメントは、個人やグループ、コミュニティが自分自身の環境をコントロールできるようになり、自分たちの目標を達成し、それによって自分自身も他者も、生活の質を最大限にまで高められるように援助する方向で働けるようになることである」というものがあり、コミュニティ心理学の概念と多く共通するものであると言える。しかし、明確な言語化された違いは見つけることが難しいが、感覚的には若干の違いがあることも感じられる。筆者が感じる若干の違いとしては、ソーシャルワークの中でのエンパワメントの目的は、生活に目を向ける割合がより強く、コミュニティ心理学の中で考えるエンパワメントの目的は、生活に目を向けるとともに、その生活に対する個人の受け止め方にも、ある一定の関心があるように感じられる。このことは、コミュニティ心理学の中で、「個人のエンパワメントは、心理的エンパワメントともいわれる」(植村, 2012)と言われることと関係しているかもしれない。おそらく、ソーシャルワークの領域では個人のエンパワメントを心理的エンパワメントと言い換えられるような意味では考えられておらず、行動や現実生活にかかわる意味で使用されていると思われる。

このことは、後に述べる「成長モデル」と「修理モデル」の割合として考えることが可能ではないかと思われる。山本和郎は、『スクールカウンセラー その理論と展望』(1995)の中で、「成長モデル」とは「一人ひとりの心の意味の世界を大切にし、表に現れた行動や症状の意味に着目しそれを解釈学的にアプローチする。人の成長、成熟を見守り、待ち、支える Being を大切にする」という概念のことであ

り、「臨床心理士は『成長モデル』に立っている点に、その独自性があると言える」というように、心理学独自の視点であると述べている。そして、「修理モデル」とは「問題を解決するには、原因をみつけ、原因がわかれば結果が改善される。Doing を重視する」概念のことである。コミュニティ心理学の視点を有した実践の場合、割合として、「成長モデル」の割合が、ソーシャルワークの領域よりも少し多い、と言うことができるかもしれない。

コミュニティ心理学における個人のエンパワメントなどを詳しくみていくために、エンパワメントは個人、組織、コミュニティの3つのレベルにわたり、相互に関連しており、個人の層の例には、個人の力、能力、組織の層には自然の援助システム、コミュニティの層には、社会政策に対する活動前の態度、社会変革などが挙げられるとしている、Zimmerman (2000) の考え方について、植村 (2012) を参考にまとめて紹介したい。

まず Zimmerman (2000) は、エンパワメントを「過程 (process) としてのエンパワメント」と、「成果 (outcome) としてのエンパワメント」に区別して捉えることを提唱し、前者を“empowering”，後者を“empowered”と名付けている。そして、エンパワメントが多層構造を持つものであることを踏まえて、個人・組織・コミュニティの三つの分析レベルを設定して、時間（過程・成果）と層（レベル）を組み合わせた理解をしようとしている。

個人のエンパワメントとしては、Zimmerman (2000) は、「個人内的側面」・「相互作用側面」・「行動的側面」の3つの側面を考えている。

「個人内的側面」としては、精神内界のダイナミクスに焦点が置かれ、自尊感情やコントロール感（知覚されたコントロール）、自己効力感のような心理学がこれまで自己概念として取り上げてきたものと重なる部分が多い。

「相互作用側面」としては、人々がどのようにして社会環境を理解し、それに影響を及ぼそうとするかに関連しており、エンパワメントのためには二

つの対人的スキルが求められるとしている。1つ目の対人的スキルは、他者と共同して働くのに必要なスキルであり、問題解決スキルや葛藤解決スキル、他のメンバーに関する知識、多様性に価値を置くこと、他者とうまく結合する能力などがある。2つ目の対人的スキルは、存在しているパワーからのコントロールを獲得するのに必要なスキルであり、誰が資源をコントロールしているか、その人やグループをどのように操作できるか、影響力を獲得するためにどのレベルにアプローチするのが良いかなどの知識やスキルを増大させることが含まれる。

「行動的側面」としては、コミュニティ組織や活動に参加することによってコントロールを獲得するための行為をすることに関係しており、市民参加に近い概念である。市民参加とは、「共通の目標を達成するために個人が報酬なしで参加している、あらゆる組織化された活動への関与」(Zimmerman & Rappaport, 1988, P726) と定義されるもので、エンパワメントの原因でもあり、結果でもある。

組織のエンパワメントについて Zimmerman (2000) は、「その組織がメンバーをエンパワーしているか (empowering organization)」と、「その組織自体がエンパワメントを目指して活動しているか (empowered organization)」に分けて考えている。

コミュニティのエンパワメントについては、「個人や組織にとって必要な協調的な努力に対して、コミュニティの社会的・政治的・経済的資源をより大きな社会から獲得するなどして整備し、また、それらを利用しやすくすること」(清水・山崎, 1997) であり、コミュニティ全体での意識高揚、合意形成、社会的支援体制、社会的弊害要因の除去などを通して、住民全体の主体性や自立性、力量形成をはかることにある、というものである。

さらに、三島 (2007) の中で、「従来の専門職中心の専門性のありようは……ユーザーの生の体験世界の流れを尊重し、彼らのエンパワメントの実現が保障されるような専門職の関与の仕方、そうした意味での役割の変更、サービス・システムの再編が求め

られている」と述べられている。このような新しい動き方の出来る心理士として、求められている動きは、エンパワメントに象徴されるような、個人と環境の相互作用を意識して双方に働きかけ、ユーザーが自分で自分の生活を過ごせるように支えていくことである。

V, コミュニティ心理学の定義

上述したように、コミュニティ心理学は1965年5月の「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議」において、「複雑に相互作用しあっている、社会システムと個人の行動を結びつける心理過程全般についての研究を行う。この結びつけを概念的かつ実験的に明らかにすることによって、個人、集団、および社会システムがよりよく機能するような活動計画の基礎を提供する」(Bennett, C.C. et al., 1966)と定義されたことから始まった学問であると言われている。この定義は、長い間コミュニティ心理学の基礎にあるものとして引き継がれている。

マレル (Murrell, S.a., 1973) は、コミュニティ心理学について組織心理学的視点から、「社会システムのネットワークとポピュレーションおよび人々との間の交互作用に関する研究、人間と環境との『適合性』を改善するための介入方法の開発とその評価、新しい社会システムの設計とその評価、そうした知識や改革による当該個人の心理・社会的条件の向上の試みなどを行う、心理学という科学の一領域である」と定義している。

その他にも、Zax & Specter (1974) は、「コミュニティ心理学は、人間行動の諸問題に対する一つのアプローチである。そのアプローチには、人間行動の問題は環境の力によって生成され、また、その環境の力によって人間行動の問題が軽減されるという、環境の潜在的寄与を強調している」と述べている。

この定義について、植村 (2012) は、「人の行動は常に環境の力によって影響を受けるといふ、環境の

もつ影響力の大きさを強調するものとなっている」と述べている。コミュニティ心理学の根底には、人間の行動を生態学的視座 (ecological perspective) から捉えるということが常に意識されているが、この際の環境の影響について、特に意識して定められている定義と言うことができるかもしれない。

さらに、Duffy & Wong (1996) は、「コミュニティ心理学は、集団や組織 (そしてその中の個人) に影響を与える社会問題や社会制度、およびそのほかの場面に焦点を合わせる。その目標は、影響を受けたコミュニティ・メンバーや心理学の内外の関連する学問とのコラボレーション (協働) の中で作り出された、革新的で交互的な介入を用いて、コミュニティや個人のウェルビーイングをできるだけ完全にすることである」と定義している。

このように、コミュニティ心理学発足から30年程経て単独の学問を意識した定義ではなく他の専門職との協働が前提で、その中で検討された介入を行うという定義へと変化していることがうかがえる。

Duffy & Wong (1996) は、さらに「コミュニティ心理学の理念と目標」として、①治療よりもむしろ予防、②強さとコンピテンス (有能さ) の協調、③生態学的視座の重要性、④多様性の尊重、⑤エンパワメント、⑥代替物の選択、⑦アクション・リサーチ、⑧社会変革、⑨他の学問とのコラボレーション、⑩コミュニティ感覚、を挙げている。

さらに、Dalton, Elias, & Wandersman (2001) は、「コミュニティ心理学における七つの中核的価値」として、①個人の幸福、②コミュニティ感覚、③社会的公正、④市民参加、⑤コラボレーションとコミュニティの強さ、⑥人の多様性の尊重、⑦経験に基づくこと、を挙げている。

山本 (1986) は、「コミュニティ心理学とは、さまざまな異なる身体的心理的社会的文化的条件を持つ人々が、だれもが切り捨てられることなく共に生きることを模索する中で、人と環境の適合性を最大にするための基礎知識と方略に関して、実際に起こるさまざまな心理的社会的問題の解決に具体的に参加

しながら研究をすすめる心理学である」としている。この定義について、植村（2012）は「個人の健康とウェルビーイングの視点から、問題解決のために人と環境の適合性を図る方略を求めて、参加しながら研究する姿勢を強調している」と述べている。

Ⅵ コミュニティ心理学の独自性

山本他（1995）は『臨床・コミュニティ心理学』の中で、精神医学の土台は「修理モデル」であるが、心理臨床の独自性は「心の成長モデル」であると述べている。つまり、「生活環境の変化、人間関係の変化によって生じた心の課題にどう対処するかをともに考え、その心の課題への対処に必要な社会的支援を導入して行くよう心の援助をすすめていく。つまり、症状発生の持つ意味を、人生上の心の発達課題を乗り越えて成長していくことを援助する視点に立っている」ものであるとしている。そして、「修理モデル」と「心の成長モデル」はメンタルヘルス対策の車の両輪となるべきものであり、コミュニティ心理学の基本的アプローチは、コミュニティの心理・社会的問題を社会体系と個人の相互作用の中でとらえ、個人の変革のみならずその個人をとりまく社会体系の変革を目指すことであると述べている。

山本和郎は、『スクールカウンセラー その理論と展望』（1995）の中で、「成長モデル」とは「一人ひとりの心の意味の世界を大切に、表に現れた行動や症状の意味に着目しそれを解釈学的にアプローチする。人の心の世界を共感的に理解し、相手の心に参加する意識を大切に。人の成長、成熟を見守り、待ち、支える Being を大切に」という概念のことである。そして、「修理モデル」とは「問題を解決するには、原因をみつけ、原因がわかれば結果が改善される。Doing を重視する」概念のことである。成長モデルとは、例えば学校現場で生徒の問題行動に対する時、「すぐに対処方法にとびつくなではなく、問題行動は当面の生徒にとってどういう意味があるのか、本人はどう理解し感じているのか、

さらに、この生徒の問題行動は教師や学校に何を問いかけているのかその意味は何かをまず考える。問題行動を起こしている児童生徒の心の成長・発達の視点でとらえなおし、その子自身の気づきと心の成長を促進するよう支えていくアプローチをとることになる」（山本・村山、1995）と表現されているように理解して行くことである。ただし、「両方をしっかりと備え、それを効果的に使い分ける力量が必要」と述べられており、「臨床心理士の中には、成長モデルに偏りすぎている人がいるのではないか」という警告も述べられている。従来の臨床心理学では、「成長モデル」に偏って当事者を見ていくところがあり、また、コミュニティ心理学と共通する部分の多い社会福祉学では、Doing を重視した「修理モデル」に近い、現実的な問題点を発見し、そこを調整したり改善したりしていく部分が強いと言うことができるであろう。そして、コミュニティ心理学の独自性としては、あくまでも心理学的に「成長モデル」で状況を見ていく視点と、社会的文脈の中に生きるその方の現実的な問題解決も目指していくという両方の視点を重視することにあると言えるであろう。

さらに、山本（1984）は伝統的心理臨床家とコミュニティ心理臨床家の違いをまとめている。（表2）加えて山本（2000）は、コミュニティ心理学の発想をもった心理臨床家の基本姿勢として、以下の12点を挙げている。

- 1, 伝統的な心理臨床家が、心的内界至上主義 (intrapsychic supremacy) であるのに対して、コミュニティ心理学的心理臨床家は、心的内界の要因と同時に社会的環境の要因をも重視する。
- 2, 個人の心的内界に介入するよりも、社会的・コミュニティ的介入の方が効果的と考える。
- 3, 予防の視点を重視する。
- 4, 心理的悩みの軽減よりは、むしろ社会的能力を強化することを目標とする。
- 5, コミュニティ心理学的心理臨床家の土俵は、地域社会の人々が生活している場である。

表2 伝統的心理臨床家とコミュニティ心理学的心理臨床家 (山本, 1984)

	伝統的心理臨床家	コミュニティ心理学的心理臨床家
視点と姿勢	1. 個人対象 2. 治療 3. 専門家中心の責任性 4. 病気 5. 疾病性 (illness) 6. 病気の治療 7. セラピー 8. パタン化したサービス 9. 単一のサービス 10. 一人でかかえこむ 11. サービスの非連続性 12. 専門家のみ	集団, マス, 地域社会を対象 予防, 教育 地域社会中心の責任性 来談者の生活, 生きざまの構造 事例性 (caseness) 心の成長促進 ケアを基盤 創造的なサービス 多面的, 総合的サービス ケア・ネットワークづくり サービスの連続性 非専門家, ボランティアの尊重と活用
援助構造	13. 個人の現在から過去へ 14. 時間構造 15. 弱い側面の変革 16. 個人の内面への働きかけ 17. 深入り 18. よろいをはぐ 19. 距離の固定	個人の現在から未来へ 空間構造 強く側面の活用と強化, 資源の利用 環境への働きかけ 深追いしない, 見守り よろいを大切にする 距離の柔軟性

6. 臨床家の方から来談者の方へ積極的に近づいていく (seeking mode)。
7. クライアントを支えているのは地域社会の人々である (地域社会中心主義) という認識のもとに, 地域社会にいる非専門的協力者を大切にする。
8. 地域社会の人々のニーズに敏感に新しいサービスを模索していく。
9. 家庭, 近隣社会, 職場, 学校, 居住環境, 騒音などの都市環境, 生活環境, 人間環境, 社会システムの問題に広く目を向け, 様々な専門家との協同の中で支援を展開する。
10. メンタルヘルス教育・啓発活動等の予防を行う。
11. メンタルヘルス問題は広範囲の社会問題と関係しており, 問題を明確化するデータを提供し, 改善策を示しながら上位レベルの社会問題にコミットしていく「研究データに基づく介入」を行う。
12. 自然観察的 (naturalistic), 生態学的

(ecological) 研究法を活用する, というものである。

また, 笹尾他 (2007) は, 他の学問分野との比較を行うことで, コミュニティ心理学の独自性を考えている。以下, そのエッセンスを紹介する。

地域精神保健 (community mental health) との違いとしては, 地域精神保健が, 地理的区分によって対象を決めてメンタルヘルスのリハビリと心理的機能回復を行うことを目的としているのに対し, コミュニティ心理学は地理的区分ではなく, コミュニティ全体を対象として予防と健康促進を目指しているという違いがある。

臨床心理学 (clinical psychology) との違いとしては, 臨床心理学が個人のメンタルヘルスの問題を社会的コンテクストから孤立させて理解し, 治療するという「医療モデル (Medical Treatment Model)」に基づいて専門家がクライアントを援助するという構造になっているのに対し, コミュニティ心理学では, 個人を社会的コンテクスト内で捉え, 個人や集

団のウェルビーイングを高めるために社会変革を擁護し、当事者らとの協働を重視し、予防を念頭に置いた問題解決を目指しているという違いがある。特に、この当事者の方についてパワーを持っている方とみなして、対等な立場で共に考えていくことを強調している点は、大きな違いであると言える。

社会心理学 (social psychology) との違いとしては、「コミュニティ心理学と社会心理学は、社会的勢力に注目するが、前者は個人外の勢力、後者は個人内におけるその勢力の『解釈』に焦点が置かれる。つまり、社会心理学では、われわれを取り巻く社会に関する個人の認知、思考、態度、情緒と言った『社会的認知』が研究対象となるが、コミュニティ心理学においては、現実社会に存在する個人や集団をそのコンテクストに沿って、マクロ的およびマイクロ的な変数に注目する」と述べられている。

社会福祉学 (social work) とコミュニティ心理学とは、重なる点が多いと述べられている。重なる点としては、「両領域とも、人間の価値観の重要性、個人と社会との相互関係への注目、抑圧された社会階層、さらに問題解決に当たっては、『欠陥型モデル (Deficit Model)』よりも『人間の強み (human strengths)』に焦点が置かれる」点があると述べられている。そして、違いとしては、「社会福祉学では、個人や家族レベルでの介入としてケースワークが中心となるが、コミュニティ心理学では、組織やコミュニティレベルでの介入も重要視され、理論に基づいた実践研究やプログラム評価研究のスキルが、コミュニティ心理学者の教育では大事である」と述べられている。(笹尾他, 2007)

このように、社会福祉学 (social work) とコミュニティ心理学とは、重なる点が多いが、山本 (2000) は、「心理臨床の専門的独自性は、クライアントの心の内面の問題を共に見つけ、心の成長・成熟を援助するところにある。そのためには、面接室で、心を見つめる作業をきちんとする条件を整えなくてはならない。しかし、忘れてはならないのは、この心

の作業をする面接室も、他の専門機関との連携のう えで成り立っているものであり、心理臨床家自身もクライアント自身も、地域社会の人々との連携の中で生きている」と述べている。このように、心理臨床家自身も、クライアントも環境とつながった存在として、一緒に心の作業をしていく、という視点は、コミュニティ心理学独自の視点であると思われる。社会福祉学 (social work) とコミュニティ心理学から見立てを行っていく際にも、生態学的視座に立つという点は同じでも、「クライアントの心の内面の問題を共に見つけ、心の成長・成熟を援助する」(山本, 2000) ために、その中に含まれる個人から見た世界の見え方や捉え方など、個人の体験の意味により多く注目をしていることが、コミュニティ心理学の特徴ではないかと思われる。

他には、コーチン (Korchin, S.J., 1976) は『現代臨床心理学』の中で、コミュニティ心理学の特色を13項目にまとめている。それを、田中 (1995) が『臨床・コミュニティ心理学』の中でさらにまとめたところでは、コミュニティ心理学は、伝統的な臨床心理学あるいは地域精神保健の領域に比べて、①地域住民志向性が強く、コミュニティ成員のニーズを優先させる、②病者に対する治療よりも健常者に向けての予防あるいは成長志向性が強い、③クリニックでクライアントの来談を待っているという受身の姿勢ではなく、こちらから現場に積極的に出向き、その地で援助活動をする、④他領域の専門家との協力および非専門家を含め、社会資源をフルに活用する形を取り、地域住民への直接サービスよりもコンサルテーションや教育などを通して間接的に寄与する機会が多い、⑤精神健康に関係がある社会的問題を従来よりも幅広い範囲で扱い、社会変革を促進させるといった志向性を持つ、⑥自然場面での観察と生態学的アプローチを重視する点が特色である。

これらのように、コミュニティ心理学の独自な点として述べられていることを総合すると、大きく以下のようにまとめることができると思われる。

① 人間を社会的文脈の中の存在として捉える。生

態学的視座から捉える。

- ② 機能的なコミュニティを対象としている。
- ③ 相談機関で相談に来られる方を待つという姿勢ではなく、現場に積極的に出向き、その地で援助活動をする。
- ④ 当事者もパワーを持つ方とみなすなど、非専門家や多職種との対等な関係による協働を強調している。当事者の持っている強さを大切にしている。
- ⑤ あくまでも心理学的に「成長モデル」で状況を見ていく視点と、社会的文脈の中に生きるその方の現実的な問題解決も目指していくという両方の視点を重視する。
- ⑥ 目標は、コミュニティや個人のウェルビーイングを高めること、人と環境の適合性を最大限に高めることである。
- ⑦ エンパワメントを中心概念においている。
- ⑧ 地域住民への直接サービスよりもコンサルテーションや教育などを通して間接的に寄与する場が多い。
- ⑨ 予防的・成長促進的視点が強い。
- ⑩ 介入の中で必要と思われる社会変革があれば、社会変革を求めている。

要約すると、コミュニティ心理学の独自性を示す概念としては、①生態学的視座、②機能的コミュニティ、③現場に出向く、④非専門家や多職種との対等な協働、⑤成長モデルと現実的な問題解決の視点、⑥人と環境の適合性、⑦エンパワメント、⑧コンサルテーションなどの間接的支援、⑨予防的・成長促進的視点が強い、⑩社会変革などが挙げられることが明らかになった。

おわりに

上述してきたように、コミュニティ心理学は、比較的新しい学問であり、今までは学問的な枠組みを構築していくことが必要であった。これからは、それらの多様な枠組みとして述べられてきた理論を基に、質の高い実践研究が積み上げられていくことが

必要ではないかと考える。

そのためにも、個人を中心としたコミュニティ心理学の視点を活かした実践研究に加えて、今後はより広義な意味でのコミュニティを対象とした実践研究が求められる。例えば、計画的な社会変革、予防的介入、健常者の成長促進、専門家とコミュニティとの協力関係を作ること、コミュニティの諸問題に専門家として参加し問題を究明すること、コミュニティの関係機関に対するコンサルテーションなどについての、多くの質的研究が進むことによって、学問的な発展が望まれる。

また、今回は多くの領域を取り上げ、広く概観することに重点を置いたため、それぞれの領域におけるコミュニティ概念との比較検討が不十分であった。今後は、コミュニティ概念の中でも焦点を当てる部分を絞ってより深く概念化していくことが必要であると思われる。

文献

- Adams, R. (2003) *Social Work and Empowerment* (3rd ed.). *Palgrave Macmillan*. (杉本敏夫・齋藤千鶴監訳, 2007, ソーシャルワークとエンパワメント—社会福祉実践の新しい方向, フクロウ出版)
- Barker. (1968) *Ecological Psychology: Concepts and methods for studying the environment of human behavior*. *Stanford University Press*
- Bennett, C.C., Anderson, L.S., Cooper, S., Hassol, L., Klein, D.C., & Rosenblum, G. (Eds.). (1966) *Community Psychology: A report of the Boston conference on the education of psychologists for community mental health*. *Boston University Press*
- Brodsky, A.E. (1996) Resilient single mothers in risky neighborhoods: Negative psychological sense of community. *Journal of Community Psychology*, 24(4), 347-363
- Bronfenbrenner, U. (1979) *The Ecology of Human Development: Experiments by nature and design*. *Harvard University Press*. (磯貝芳郎・福富護訳, 1996, 人間発達の生態学, 川島書店)
- Chavis, D.M., Hogge, J.H., McMillan, D.W., &

- Wandersman, A. (1986) Sense of community through Brunswik's lens : A first look. *Journal of Community psychology*, 14 (1), 24-40
- Chavis, D.M. が主宰するウェブサイト ([http://www.senseofcommunity.com/files/Sense%20of%20Community%20Index-2\(SCI-2\).pdf](http://www.senseofcommunity.com/files/Sense%20of%20Community%20Index-2(SCI-2).pdf))
- Dalton, J.H., Elias, M.J., & Wandersman, A. (2001) Community Psychology : Linking individuals and communities. *Wadsworth*.
- Hershenson, D.B. & Berger, G.P. (2001) The State of direction of CACREP-Accredited programs. *Journal of Counseling & Development*, 79, 188-193
- 井上孝代 (2007) コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会. 236-243
- 金子勇 (1989) 新コミュニティの社会理論. アカデミア出版会
- 木原研三編 (1994) 新グローバル英和辞典. 三省堂 342
- Klein, D., (1968) Community Dynamics and Mental Health. *Wiley*.
- 国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会報告 (1969) コミュニティー生活の場における人間性の回復
- 倉田和四生 (1985) 都市コミュニティ論. 法律文化社
- Lewin, K., (1951) Field Theory in Social Science. *Harpe* (猪股佐登留 (訳). 1956. 社会科学における場の理論. 誠信書房)
- 松原治郎 (1978) コミュニティの社会学. 東京大学出版
- 三島一郎 (2001) 精神障害回復者クラブ—エンパワーメントの展開.
- 三島一郎 (2007) コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会. 70-83
- Moos, R.H. (1973) Conceptualization of human environment. *American Psychologist*, 28, 652-665
- 村山正治・鶴養啓子編 (2011) 『子どもの心と学校臨床 No.5』遠見書房
- Murrell, S.A., (1973) Community psychology and social systems. *Behavioral Publications*. (安藤延男 (監訳). 1977. コミュニティ心理学. 新曜社)
- Obst, P., Smith, S., & Zinkiewicz, L. (2002) An exploration of sense of community, part3: Dimensions and predictors of psychological sense of community in geographical communities. *Journal of Community Psychology*, 30(1), 119-133
- プラント, R., (中久郎・松本通晴訳. 1979. コミュニティの思想. 世界思想社)
- Rappaport, J. (1987) Terms of empowerment/exemplars of prevention : Toward a theory for community psychology. *American Journal of Community Psychology*, 15(2), 121-144.
- Sarason, S.B. (1974) The Psychological Sense of Community: Prospects for a community psychology. *Jossey-Bass*.
- 笹尾敏明・渡辺直登・池田満 (2007) コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会. 4-19
- Scileppi, J.A., Teed, E.L., & Torres, R.D. (2000) Community Psychology: A common sense approach to mental health. *Prentice Hall*. (植村勝彦 (訳) 2005. コミュニティ心理学. ミネルヴァ書房)
- 清水準一・山崎善比古 (1997) アメリカ地域保険分野のエンパワーメント理論と実践に込められた意味と期待. *日本健康教育学会誌*. 4 (1). 11-18
- 鈴木広編 (1978) 都市化の社会学. 誠信書房
- 鈴木広 (1986) 都市化の研究. 恒星社厚生閣
- 田中富士夫 (1995) 臨床・コミュニティ心理学. ミネルヴァ書房
- 植村勝彦編 (2007) コミュニティ心理学入門. ナカニシヤ出版. 7
- 植村勝彦 (2007) コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会. 39-52
- 植村勝彦 (2012) 現代コミュニティ心理学 理論と展開. 東京大学出版会 4, 181-194, 29-43, 6-17, 166
- 山本和郎 (1984) コミュニティにおける心理臨床家—臨床心理の独自の領域を求めて—. 村瀬孝雄・野村東助・山本和郎編著, 心理臨床の探求, 有斐閣
- 山本和郎 (1986) コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践. 東京大学出版会
- 山本和郎 (2000) 臨床心理学③ コミュニティ心理学とコンサルテーション・リエゾン 地域臨床教育・研修. 培風館. 36-37. 40-46
- 山本和郎 (2001) 臨床心理学的地域援助の展開—コミ

ユニティ心理学の実践と今日的課題. 培風館.
164-182.
山本和郎・原裕視・箕口雅博・久田満編 (1995) 臨
床・コミュニティ心理学. ミネルヴァ書房. 2-9
山本和郎・村山正治 (1995) スクールカウンセラー—
その理論と展望. ミネルヴァ書房. 4-7
Zax, M. & Specter, A.S. (1974) An Introduction to

Community Psychology. John Wiley & Sons.
Zimmerman, M.A (2000) Empowerment theory:
psychological, organization, and community level
of analysis. In Rappaport, J. & Seidmen, E. (Eds)
Handbook of Community Psychology. Kluwer
Academic / Prenum. pp.43-63

Definitions of Community in Community Psychology and Individuality of Community Psychology

IIDA Kaoriⁱ

Abstract : This paper attempts to organize the concept of community and the roles and tasks for community psychologists. Also, this paper attempts to define the individuality of community psychology, which contributes to solving the problems that a community faces while maintaining the viewpoint of psychology. I find that the concept of community in community psychology includes a functional community that we cannot see — for instance, human networks or groups sharing identity — as well as social systems that we can see, such as families, schools, and companies. Functional community does not need to mean that the community members live in nearby areas, or are engaged in the same activity. But the concept of community in Japan is often defined as a community whose members live close together, sharing activities. Finally, I find that the individual concepts in community psychology are as follows: (1) ecological perspective (the theory that a person lives under the influence of their environment); (2) Functional community; (3) Community Psychologists approach clients positively (seeking mode); (4) An equal collaboration between non-professional persons and occupational persons including other related professions; (5) Community Psychologists value two viewpoints – one is to help clients solve their own problems by themselves, while paying attention to the meaning of clients' actions, symptoms, and what lies behind them, and the other is to employ pragmatic problem-solving approaches such as social casework and creating social support networks; (6) Person-environment fit (P-e fit); (7) Empowerment (we consider that clients are persons with power, and we help them realize their inner power); (8) Indirect support such as consultations; (9) Preventive viewpoints and encouragement; (10) Sense of Community (a feeling about a community where a person belongs); (11) Social change.

Keywords : Community psychology, functional community, ecological perspective, empowerment, consultation, prevention, sense of community, social change

ⁱ Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University